
他人の匂い

齊藤狐兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他人の匂い

【Zコード】

N7010M

【作者名】

齊藤狐兎

【あらすじ】

強い妄想癖のある中学一年生新井健一は、立て続けに隣のじいさんと級友の死に直面した。健一は一人の死にある共通点を見出す。二人が死の前日に発していった強烈な体臭。

周囲はそのことに気づいていない。

コンプレックスにまみれていた健一は有頂天になる。

自分は特別な人間だ。

誤った認識のもと、健一は暴走する。

好々爺の悪臭

通学路を進む足は異様に重かつた。足枷をはめられて歩いているような感じ。

行きたくない行きたくない。帰りたい早退したい。まだ学校に着いてもいないのに。

「健二君おはよう」

声のした方に目をやると、隣の家に住む山田のおじいさんが健二に向かって会釈していた。両手にゴミ袋を持っている。

「おはようございます。お久しぶりですね」

「そうだねえ。健二君がアフリカ旅行に行つて以来だから、一週間振りくらいかな。おみやげにもらったマサイ族の木彫り人形、健二君が選んでくれたんだって。あれ、いいよねえ。あの憎らしい表情。ケースに入れて居間に飾ってるんだ。本当にありがとうございます」「喜んでもらえてよかったです」「アフリカはどうだった」

「すこかつたですよ。象とかライオンとか、なんかもう世界が違います、日本で悩んでいたのが馬鹿みたいに思えました」

「そうかそうか、それはよかったです」

山田のおじいさんが言つた。笑顔が大便を拭いたあのティッシュみたいにクシャクシャだ。

好々爺。そんな言葉がぴつたりくる。なんだか元気が出てきた。今田はこのまま突っ走るぞ。

「それじゃあ、行つてきます」

頭を下げておじいさんの横を通り過ぎよつとしたその時、とてつもない悪臭が健二の鼻腔を襲つた。

「うわあ——」

強烈な臭いに一メーター弱飛び退く。

「大丈夫かい、健二君」

「なんか、とんでもない臭いがして……」

「とんでもない臭い。ひょっとしてこれかなあ」

おじいさんは手に持ったゴミ袋を持ち上げて、犬のようになくんくん嗅いだ。

「そんなに臭わないけどなあ」

首をかしげるおじいさん。その間も強烈な臭気は健一の鼻腔を犯し続けていた。

「失礼します」と頭を下げ、万引きしたスーパーの出口で声を掛けられた少年のように、走つてその場から立ち去つた。

おじいさんが見えなくなる距離になつてから立ち止まり、一息ついた。

一体あの強烈な臭いはなんだつたんだ。意識を刈り取られるような臭いだつた。おじいさんの言う通り、あのゴミ袋が臭いの源だとしたら、あの中には一体なにが入つているんだろう。

昨日の一時間ドラマみたいにバラバラにされた死体だつたりして。想像して寒気がした。

袋の大きさからして子供だらうか。そちらへんを歩いていた小学生を無理矢理家に連れこんで……。いや、待てよ。もし死体を切斷したのだとしたら別に一回で捨てなくともいいのだ。おじいさんは一体だれを殺したのだろう。奥さんかなあ。娘さんかなあ。無差別殺人つて可能性もある。そうなつたらもう推理しようがない。

ピッピッピッピッピ。腕時計が鳴つた。八時半を知らせるアラームだ。アラームは耳障りな電子音と共に健一に客觀性をもたらした。危ない危ない。いつもの妄想癖が出てしまつた。

あんなやさしいおじいさんが人を殺したりするわけないじやないか。魚や食肉が腐つたつてあんな臭いくらいするだろう。でもあんな殺人級の臭いになるのか……。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ。こんなことばかり考へてるからいじめられるんだ。

健一は頭のモヤを振り払つように全力疾走で学校に向かつた。

からすの鳴き声が響く夕焼け空。健一は半開きの口で地面を見つめていた。蟻の生態観察をしていたわけではない。本人は家に向かっているつもりなのだが、足がまつたく動いていないのだ。

「どうしたんだい。浮かない顔して」

顔を上げると、山田のおじいさんが慈悲深い眼差しで健一を見ていた。

「別になんでもないです」

目を逸らして答えた。

本当は急行電車に飛び込みたいような心境だったが、赤の他人のοじいさんに言つよつなことではない。

「そうかい……。こんなおいぼれでも相談に乗るくらいは出来るから、なんかあつたらいつでも言つてきなさい。健一君は長男の孫によく似ていてねえ。他人とは思えないんだよ」

その言葉が健一を繋ぎ止めていた理性の糸を叩き切つた。涙がとめどなく溢れる。

「僕は、なにも間違つてないんです。ただ僕は正しいことをしただけなんだ」

「そうかそうか。健一君は悪くない。一体なにがあつたんだい」

山田のおじいさんが幼子をあやすよつに言つた。

「帰りの、会で、なにか、伝える、ことがありませんかつて、田直が、言うから、掃除が、行き届いて、ないつて、言つたんです。うつ。だつて、廊下も、教室も、ほこりだらけで、ひどかつたから」

「そしたら、クラスの友達にいじめられたんだね。そうかそうか。よしよし、健一君はなにも悪くない。なにも心配することはないよ」

山田のおじいさんが健一の肩を抱いた。

「おじいさん、僕、僕・・・」

健一はおじいさんの一見薄いが骨太な胸に飛び込んだ。そして次の

瞬間おじいさんを思い切り突き飛ばした。

憐れなおじいさんは尻から転倒し、後転が途中で失敗した結果、肛

門を宙に晒して いるような格好になつた。

「くせええええええええ」

思わず口に出していた。突き飛ばしたのも本能による反射的なものだった。

なにが起ひつたのか理解できず呆然とするおじいさん。突き飛ばした健一も自分のやつたことが信じられなかつた。

「す、すいません。あまりにもく……」

その先が言えない。臭いと言われていい気がする人間などいない。

「すいません。失礼します」

どうしようもなくなつて、その場から逃げ出した。おじいさんは呆けたような表情でその後姿を見つめていた。

なんであんなことしたんだ。人に暴力を振るうなんて最悪だ。分からぬ。分からぬ。

家に帰つてきてからずつとこんな調子だつた。頭が混乱してスクランブル交差点みたいになつていて。

あの臭いのせいだ。あれはゴミの臭いなんかじゃない。山田のおじいさんの体臭だ。一体いつからあんな体臭を発するようになつたのか。アフリカ旅行に行く前はなんの臭いもしなかつたわけだから、ここ一週間の話だらう。

肝臓の調子で体臭が変化すると、NFKのためして頂戴でやつていた。ひょつとしたら山田のおじいさんもどこかが猛烈に悪いのかもしない。もし病気だつたら早く治療しなければいけない。でもどうやつて訊けばいいんだ。

「おじいさん、体臭やばいから、病院に行つてきたほうがいいと思ひますよ」つて訊くのか。それともさりげなく「最近の人間ドッグつてすごいらしいですよ」なんて言つて検査を勧めるか。

どつちにしても自分には無理だ。そんなコミュニケーション能力はない。

健一は頭をかきむしつてベッドに倒れこみ、そのまま眠りの世界に

引きずりこまれていった。

パチッと目が覚めた。部屋の中は真っ暗。照明のひもを引っ張り電気をつける。時計を見たら三時十五分。

熟睡感はあるのにほとんど寝ていなかつたのか、と一瞬思ったが、すぐにそれが大いなる勘違いだと気がついた。外を見れば一目瞭然。街灯だけが気を吐く真っ暗闇の世界だ。十二時間近く寝ていたらしい。

ベッドの上で体を伸ばした。キュルキュルと胃袋が泣いている。なにか食べなくては。

階段を下りて居間に行くと、食卓にラップが掛けたカレーライスが置いてあつた。普段疎ましいだけの母親もこういつ時には感謝せざるをえない。

レンジでチンして、あまり大きな音を立てないようにススるようにカレーライスを食べる。するとどこからか救急車のサイレンが聞こえてきた。

こういつた第三者の緊急時に健一の胸は躍つた。怪我なのか病気なのか。命に別状はあるのかないのか。救急隊員になつた自分を妄想するのだ。

サイレンの音が近づいてくる。この町内だらうか。さらにはサイレンが近づく。

救急車が壁一枚隔てて、健一がカレーライスを食べているその真ん前に止まつた。

嫌な想像が頭をよぎる。

ひよつとして、自分が死んだのではないか。

死んだ死んだ死んだ死んだ。まだ十四歳なのに。まだキスもしたことはないのに。キスだけじゃなくてその先だつていっぱいしたかったのに。秋葉原だつてまだまだ行きたいし、サンリオピューロランドだつてまだ行つてない。まだまだまだやりたいことがたくさんあるのになんで死ななきやいけないんだ。

理不尽な死に対する怒りと恐怖で発狂する寸前、隣のアパートからの救急隊員の声で我に帰つた。

救急車を呼んだのは隣のアパートの誰かだ。そりやそうだ。ピチピチの14歳が死ぬわけない。死ぬ理由がなにもないんだ。

安堵して健一は外へ出た。

闇の支配に抵抗するように、救急車の点滅灯が光を放つている。隣のアパートから山田のおじいさんが担架に乗せられて出てきた。あんなに元気だった山田のおじいさんがどうして。昨日のおじいさんとの一幕がフラッシュバックした。

ひょっとして、自分が突き飛ばした拍子に……。

心臓のBPMがハードコアのビートを刻みはじめた。

まさかあれくらいで人間が死ぬわけない。でも相手は七十を過ぎた老人だ。司法解剖されたらどうしよう。

おじいさんは救急車に乗せられ、耳をつんざくサイレンと共に去つていった。

胸の前で合掌しながらおじいさんの無事を祈つた。助かれ助かれ助かれ助かれ。

強く押し合つている両手に額から大量の冷汗が滴り落ちた

テフで首がない田所とチビでモミアゲ部分が黒く変色している木村

数日後、山田のおじいさんは死んだ。健一はそのことを母親から朝食時に聞いた。ショックで口に入れようとしていたハムエッグを味噌汁の中に落とした。

「アラビア語の歴史」

出来るだけ平静を装い、漬物を頬張りながら訊いた。

一急性心不全みたいだな。毎日毎だからショバかなしみね。」

安堵のため息がもれ、拍子に口の中に入っていた漬物がみそ汁の中

「 もへ、 せひきからなにやひてゐるか 」

母親がフキンでこぼれたみそ汁を拭く。健一は喜びのあまり皺が目立ってきたその額にキスしようと思つたが、やつぱり気持ち悪くなつて止めた。

数日間の陰鬱な気分ともこれでお別れ。悩みから開放された反動でテンションがマックスまで上がった。白米みそ汁をかつこみ鞄をつかんで外へ飛び出す。

道をすれ違う人々にハグして回りたい気分。スキップしながら、時折、ケンケンパを交えて進む。早起き老人やコンビニ店員の冷たい視線など、ハイな健二の前には無力である。

がつて いる。

興奮の渦に巻かれた健一は、教室に入るやいなや

えつと、おは洋梨、みなさん。えつ、僕が用無しだつて」

―――。

さすがの健一も自分の過ちに気がつかずにはいられない。

とんでもないミスを犯してしまった。自分がクラスメートに迫害されていることをすっかり忘れていた。

ここでお調子者がいれば、うわーでたー、なんて言つて場を和ませるものだが、まだ時間が早かつたため、教室には真面目な男子と言も話したことがない女子しかいなかつた。

クラスメートの白い目線が健一を突き刺す。ズブズブズブズブ。うわああああああああああ。

健一は教室を飛び出し、トイレ「大」に閉じこもつた。

やつてしまつた。やつてしまつた。今まで自分はただの真面目なつまらない奴だつたけど、これで頭のおかしいつまらない奴に格下げされてしまつた。

はああああ。健一が苦悩の叫びを上げる中、トイレに誰かが入つてきた。健一は両手で口を塞ぎ声を抑える。

「あいつまじなんなんだろ。頭おかしいのかな」

「うん。おかしいんだろ。ひょつとしたらアフリカ旅行じゃなくて、病院に入院してたんじゃねえの」

「ああ、ありうる。ぶひ――」

「間違いないしょ。うひょひょひょひょ」

デブで首がない田所と、チビでモミアゲ部分が黒く変色している木村の声だ。せめて一年の番長である小熊や野球部エースでイケメンの秋本、女子に一番人気の門馬とかに言われるならまだしも、自分と大して変わらない身分のこいつらに馬鹿にされるなんて。

屈辱で身体が震えた。

「あいつどこいったんだろ」

「家に帰ったんじゃねえの」

「ひょつとしてこのトイレにいたりして。ぶひひひひ

「ありうるな。うつひょつひょつひょ

屈辱が怒りに、怒りが恐怖に変わつた。

あいつらが自分に気づいたらどうなるんだろうか。すぐさまクラス中に知れ渡るのは間違いない。便所に隠れていた新井。新井だけにお手洗いが好きなんだと馬鹿にされるのだ。クソくそ糞。

ひよひよつひよつひよ、ぶひつひつひ。一人がトイレから出て行った。一呼吸おいてトイレへ大々から出る。一人が戻ってくる気配はない。

助かつたあ。緊張が一気にほぐれる。背筋を伸ばして思い切り深呼吸……、

それは糞尿の臭いなどではなく、山田のおじいさんから嗅いだ腐敗臭だった。しかも、山田のおじいさんのときよりずっと臭い。耐え切れずトイレから飛びだして、思い切り息を吸つた。いつもの雑多な学校の匂いが心地好い。

「一体いまのはなんだつたんだ。自分の鼻がおかしくなつたのか。激しい頭痛がした。もう今日は帰ろう。」

健一の勘違い（前書き）

健一の勘違い

翌日、田所と木村のチビデブコンビが死んだ。学校からの帰り道、自転車に一人乗りしていたところを居眠り運転の四トントラックにはねられたのだ。

田所と木村の机には花が飾られ、全校朝会で黙祷が捧げられた。それなりに悲しい雰囲気には包まれたが、涙を流す者は誰一人としていなかつた。もちろん健一も泣いてなどいない。むしろ喜んでいた。

自分を馬鹿にした天罰だ。

だが感謝してもいた。あの二人のおかげで健一は自分が会得した超能力に気がついたのだ。

山田のおじいさんの死と田所・木村の死には共通項が一つあつた。例の悪臭である。あの臭いがしてまもなく三人とも死亡した。まだはつきりとは言えないが、あの臭いが三人の死と関連している可能性は高い。そしてあの臭いは、他の人間には感知できない。出来たら同じ教室で机を並べるなんて不可能だらう。つまり自分だけに備わつた超能力。素晴らしい。

しかし、なぜそんな能力が自分に備わつたのだろうかと考えた末に、一つの出来事が思い当たつた。

アフリカで罹つた原因不明の熱病だ。能力開発の契機となつたのは熱病そのものではなく、サバンナの真ん中で息も絶え絶えになつた健一になんとか族のなんとかという医者に該当する職業の人間が飲ませてくれたなんとかという植物をすり潰して液状にしたものではないかと推測した。それを飲んだ翌日に健一は嘘のように全快したのだ。

まあ、あくまでも現段階での推定でしかないし、別にきっかけなんてどうでもいいことだ。大事なのは、素晴らしい能力が自分に備わつたという事実だ。

ひやつほーーーい。健一は自分の能力に舞い上がった。もう今までの真面目しか取り柄がない陰の存在ではないのだ。

妄想はオペラ歌手が膨らました風船のようになつといつ間に膨らんだ。

超能力者としてマスコミに取り上げられ、テレビに出演し、本を出版。家でちやほや。学校でもちやほや。どこに行つてもVIPとして扱われ、女の子だつて選り取り見取りの取り放題。

自尊心も妄想同様あつという間に膨らんでいった。

他の奴等とは次元が違う。他の奴等とは生物としてのスキルが違う。他の奴等が何人束になつたつて自分がずっと価値がある。溢れ出した自尊心は横柄な態度になつて表れた。胸は常に前へ張り出し、歩幅は1・5倍に。股も自然と開き、座つた時には必ず脚を組むよつになつた。

「あいつ最近おかしくない？」

「うん。キモいくせに調子乗つてるよな」

そんな陰口は健一にとつて雑音でしかない。工事現場で電動ドリルが発する騒音みたいなもので、心地よいものではないが気にするほどではないのだ。

スペシャルな人間を他人が妬むのは当たり前のこと。

もともと持つっていた独り善がりな気質も手伝い、健一の意識は完全に別の階層へ飛んでいた。

回りのクラスメートがなんの能力もないくそ餓鬼に見えた。

受験勉強に精を出すなんてアホくさい。凡人のやることだ。喧嘩に明け暮れるなんて愚の骨頂。健一はひたすら妄想の世界で時を過ごした。

リムジンに白髪の執事。小柄だけ出るところはしつかりと出ているかわいらしいメイド。ジャグジー付きの風呂に特大ウォーターベッド。そこでかわいいメイドあんなことやこんなことをするんだ。ペちよぐりペちよぐり。ひつひつひつひ。

「新井、なにを笑つてゐるんだ。授業中だぞ」

教師に怒られ、健一は正氣の世界に戻った。

「ああ、すいません」

反射的に謝ってしまった。でもちょっと待てよ。こいつはたかが中学校の一教師。本当に謝る必要があったのか。そもそもこいつにそんな権限があるのか。

「なぜ笑つてはいけないのですか?」

「健一は毅然と問いただした。

「はつ。おまえはなにを言つているんだ」

「なんの権限があつて、おまえは僕の笑いを禁じるのかと訊いてるんだ」

「なんの権限て。おまえそりゃ、教師の権限に決まつてるだろ?が「中学校の教師に僕の表現を一方的に禁じる権限があるんですねえ。へ、すごいなあ。それはもちろん六法全書に記載されているんですねえ。何条ですか。帰つて調べるので教えてください」

「へ、屁理屈を言つな。授業中に笑つていいわけないだろ?」

「だ、か、ら。僕の笑いがもし授業の妨げになるのであれば、注意されても仕方ないですよ。でも、僕の笑い声は授業を中断させるほど大きなものだつたでしようか」

「いい加減にしろ。勉強する気がないなら出て行け」

「いいえ。出て行きません。なぜなら僕は授業を受ける権利があるからです」

「なつ!/?もう、勝手にしろ」

教師は怒りで顔を赤らめ、健一をいなものとして授業を進めた。勝つた。まあ、当たり前の結果だけどそれなりにうれしい。

ハツハツハ。思わず声に出て笑つてしまつ。しかし、教師は何も言つてこない。健一は更に大きな声で笑つた。
ハツハツハ。ハツハツハ。アハアハアハアハアハアハアハアハ。ヒヤツヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ。

これが選ばれし者の特権か。健一は変声期が終わつたばかりの不安定な声で笑い続けた。

変人、狂人、変態、基地外。さまざまな侮蔑のレッテルが健一に貼られた。学校内で健一に話しかける人間はない。授業中、休み時間、給食時、登下校、健一はいないものとして扱われている。不良グループも健一には一切からんでこなかつた。本当にやばい奴だと思われているんだろう。

こんな状況にさすがの健一も嫌気が差してきた。

おかしい。こんなはずじゃない。

健一の構想、といふか妄想では、とつぐのとうに死の予言を的中させて学校中の人気者になつてゐるはずなのだ。それなのに、くそう。なぜあの臭いが一切しないんだ。

苛立り極まつて、拳で廊下の壁を思い切り叩いた。周囲にいた生徒が驚いて健一を見たが、すぐになにごとも無かつたかのように歩き始めた。

裏で自分を黙殺する取り決めでもしてゐんじやないか。そう勘ぐらすにはいられないほどに足並みが揃つっていた。

実際のところ、健一を黙殺すべしという取り決めは存在した。「健一君は調子が悪いのでそつとしておいてあげましょう」という

建前の上だつたが、実際に健一は孤独に苛なまれていた。

どうにかしなくては。健一は焦つた。このままではただの嫌われ者、変人として中学生活を終えてしまう。それは困る。将来ビックになつたとき、「中学時代は手のつけられない変人で、恋人はもちらん、友人一人すらない、教師すら関わりあいになるのを避けるような正真正銘の爪弾き者でした」なんて暴露されたら最悪だ。

悶々とした日々を送る健一だつたが、ある日眠りにつこうと入つたベッドの中で決心した。

このままではおかしくなつてしまつ。なんとかしなくてはいけない。

待つてゐるだけでは駄目だ。

ベッドから跳ね上がり、みそ行きの服に着替えると外に飛び出した。

焦燥に背中を押されて向かつた先は繁華街、秋葉原だ。

これだけの人間がいれば一人ぐらいは臭うはずだと、健二は当然もなく秋葉原をさまよつた。しかし、そうそう死ぬ直前の人間には出くわさない。

うーくそ。うーくそ。

目を血走らせ獸のようにうなる健二に、泥酔したサラリーマンでさえも道を譲つた。それほどに危ないオーラを全身から発していたのだ。

誰か死ぬやつはいねーか。誰か死にたい奴はいねえのか。

なまはげのように徘徊する健二の暗い目線の中に、一人の女とそれを写すテレビカメラが入つた。タスキを肩にかけ、豊かな髪の毛を後ろにひつつめた堅そうな女。タスキには女性にもつと力を

豊田幸子 と書かれている。

「女性の仕事や権利を守り、子育て環境の更なる向上を目指します。

豊田、豊田幸子をよろしくお願ひします」

政治家か。テレビで参院選がどうたらと言つていたことを思い出した。こいつが死ねばいいんだ。自分で予言して自分で殺せばいいんだ。なんでこんな簡単なことに気付かなかつたんだろう。

健二はよろよろと豊田に近づいた。揃いの白ジャンパーを着た豊田の選挙スタッフが健二に気づき、でかい尻を振るわせて慌てて近づいてきた。

「豊田幸子をよろしくお願ひします」

そう言って、選挙公約と胡散臭い豊田の笑顔が貼りついたチラシを渡してきたが、その顔には不審者に対する警戒が滲み出していた。力メラも反応して健二を撮っている。

今がチャンスだ。腹の底から声を張り上げた。

「この女、豊田幸子は死ぬぞ。近い将来に必ず死ぬ。100%死ぬ

ぞ」

周囲の聴衆がざわめいた。駅に向かう人の流れが一瞬止まる。「なにを馬鹿なことを。そんなことなんであんたに分かるのよ」デカケツ選挙スタッフババアが目をひん剥いて言った。

「僕には分かるんだ。僕は超能力者なんだ」

「ふざけんじやないわよ。なにが超能力者よ。ちやんちやらおかしい。ただのいたずらじゃ済まないわよ。これから日本を担つていく幸子さんが、死ねるわけないじゃない」

垂れ尻肉選挙スタッフババアがそう言つなり健一につかみかかつてきた。他のスタッフがババアの暴走を止めに入る。

羽交い絞めにされてもなお、ババアは喚き散らした。

「なんで幸子さんが死ぬのよ。あんたが代わりに死ねばいいんだ。私が殺してやる。邪魔する奴はみんな殺してやる」

ババアに注目が集まっているすきに健一は逃げ出した。すでに力メラには十分映つたので、ここに長居する理由はない。駆け足で現場を離れた。

「ざまあみやがれ。これで俺も有名人だ。ビッグだ。著名人だ。はつはつは、と笑いながら重大な欠陥に気がついた。

豊田幸子は放つておいても死なない……。自分が殺さなくてはいけないのだ。今から殺しにいくか。そんなの無理だ。もし、豊田幸子が死んだ場合、自分は間違いなく第一容疑者じゃないか。アーテー、なんて馬鹿な真似をしてしまつたんだ。正気じゃない。病気だ。

学校の連中が頭に浮かんだ。

「ついにやらかしたか」「これで当分あいつの面みないですむわ。チョーうれしいんだけど」「ちゃんとした施設に入れなくちゃだめだ」「あいつがいなくなつたら繰上げで学校一の嫌われ者になっちゃうよ。うわーん」

両親の悲しむ顔も浮かんできた。

「なぜあんなことをしたのかまったく分かりません。昔は良い子だ

つたんです。成績も良くて、みんなの人気者で、学級委員だつてやつていたんですよ」「恥ずかしい限りです。これからしつかりと教育して、もう一度とこんなことがないよう、精一杯がんばっていきたいと思います」

家庭が崩壊する。お父さんはお母さんを殴り、お母さんはパチンコで現実逃避するんだ。そして原因となつた僕は精神病院に強制収容。最悪だ。

大粒の涙が健一の頬をつたつた。

う、うわああああああん。うわあああああん。
すれ違う人が振り向くほどに健一は号泣した。

人生おわた。人生おわた。うわあああああん。

その時、遠くから軽快な音楽が聞こえてきた。目をこらして見てみると、通りに特設されたステージで女の子三人が歌つており、それを取り囲むようにななりの人だかりが出来ている。健一は吸い寄せられるように近づいていった。なにやら聞いたことのあるメロディ。い。い、これは、

シャンプー ラバーズの「シャンプーハットはもつ卒業」じゃな
いか。

健一はステージに向かつて全力で走った。人にぶつかるうと、罵声を浴びせられようと一切気にしてない。生でシャンプー ラバーズが見られるなら、マザーテレサに嫌われたつていい。

人ごみを押しのけかきわけ、なんとかステージの前までやつてきた。

目の前で夢にまで見たシャンプー ラバーズの三人が歌つている。百八十近い長身が魅力のウーチャン。日本人形を想わせるカリタ力。ひどい斜視がチャームポイントのドッヂ。ひいいいいいい。たまんねええええ。

曲が終わり三人が水分を補給している。あのペットボトルがうら

やましい。あのペットボトルになりた～い。

「それでは最後の曲になりました」

ウーちゃんが額に汗を滲ませながら言った。

ええええええ。凶太い悲しみの声が聞こえた。健一も一緒になつて叫ぶ。自分が一番言つ権利があるはずだ。まだ一曲もまともに聴いてないんだから。

「みなさん聞いてください」

三人が、セーのと呼吸を合わせる。

「コスメティックリサイクル 界面活性剤はノノンノー」

うおおおおおおお。地面を揺らすほどの歓声。健一の声もその中に混じっている。

シャンプーリサイクルは健一が初めて買ったCDであり、シャンプー ラバーズの曲で一番愛聴している曲だった。

これが最後の曲だとかはもうどうでもいい。この曲を生で聴けたら死んでもいい。

嫌なことがあつたら同じだけいいことがある。相田みつお、ありがとう。

豊田幸子のことなど、健一の頭の中に微塵も残つていなかつた。イントロのシンセサイザーが鳴り響き、エフェクトの効いたボーカルが始まる。

かりたか、かりたかあああ！健一は我を忘れて叫んだ。

お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う
お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う
粉チーズで△ファンデーション

イカ墨で△白髪染め

きゅうり白菜△顔面パック

お塩で体を△洗います

お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う
お酢をリンスにお酢をリンスにお酢をリンスにして洗う

間奏が入り、メンバーがステージぎりぎりまでやつてきた。

やばい。手を思い切り伸ばせば届きそうだ。そんなことを考えていたら、ドッヂが踊りながら腕を伸ばして観客と握手しだした。

ドッヂが近づいてくる。チャンスだ。健一は思い切り腕を伸ばした。ドッヂが健一の手に気付いて握ろうとする。ドッヂの笑顔が目の前に。何度も妄想したドッヂの生肌に触れられる。緊張で心臓が少しせり上がった。

ドッヂの手が近づく。あと三十センチ、十センチ、五センチ。きたあああああ。

健一はドッヂの手を握り締めた。あたたかい。でもなんか妙な感触、つてうわあああつ。

握手した手を見て仰け反つた。

ドッヂと健一の手は結ばれていた。ただその上から得体の知れない毛むくじやらの手が二人の手を包み込んでいたのだ。

ジメつとした感触に吐き気を催す。ドッヂも同じように感じたらしく、すぐに手を引っ込めてしまつた。その瞬間、

くせええええええ。

例の刺激臭が健一を襲つた。犯人はおそらくこいつしかいない。毛むくじやらの手をたどつていくと、黄色いバンダナをした、いかにもなピザオタク口を半開きにして立つていた。

間違いない。こいつが臭いの源だ。髪の毛がぼさぼさで顔がよく見えないが、おそらく二十代だろう。自分の能力に気付いてから初めての臭い。どうしよう。彼を使って有名になるのは無理だけど、知らない顔をして通り過ぎていいものなのか。

ピザオタクが健一の視線に気付いて振り向いた。ねずみのようないに警戒心をたたえて健一を見やる。

「あ、あの、なんというか。その、なんかやりたい事とかありますか? もしもあるんだつたら、すぐにやつた方がいいです。本当に」

ピザオタクの目が一層鋭くなつた。

「あやしい者じゃないんです。ただ、その、人生つていつなにが起
こるか分からぬぢやないですか。だからやつぱり、やり切るとい
うか、毎日を必死で生きることが僕は大事だと思うんですね」
これではまるで新興宗教の勧誘者のようにだ。自分だつたらこんな
奴の言つことは絶対に信じない。

ピザオタクは健一をにらみつけながら後退した。そのとき健一の
横で大きな歓声が起こつた。なんと、今度はウーちゃんが手を伸ば
して客と握手しているのだ。

「おおおおおおお。健一はさつきよりも激しい雄叫びをあげた。ピ
ザオタクの寿命などどうでもいい。健一はシャンプレー ラバーズ
の中でウーちゃんが断トツで好きだった。恋していると言つても過
言ではない。

ウーちゃんウーちゃんウーちゃんウーちゃん。

母親を見失つた幼児のように健一はわめいた。ウーちゃんが健一
に気付く。健一は更に大声を出し、全身全靈でウーちゃんにアピ
ツた。ウーちゃんが健一の方に手を伸ばす。

やばい。まじでやばい。ウーちゃんと触れ合える。

手と手が触れ合おうとしたそのとき、ねこじやらしを当てたよう
なこそばゆい感触が手のひらに走つた。

ひやああ。思わず手を引っ込める。手に触れたものはねこじやら
しなどではなく、手の甲から毛ほつきのように生えたバンダナピザ
オタクの体毛だつた。

ひやああ。気持ちわるい。

その気持ち悪い手が、半ば無理矢理にウーちゃんの手を握つてい
る。

ふぞけやがつて。健一は息を止めバンダナピザオタクの前腕に向
かつて思い切り肘を落とした。

「ううう」

バンダナピザオタクの手がウーちゃんから離れた。健一はその隙
にウーちゃんの手を両手で握り締める。

驚いた様子のウーチャんだつたが、すぐに笑顔に戻り、長身を屈めて健一にささやいた。

「ありがとうね」

はあああああ。ウーラちゃんの吐息が耳元に……。なんて幸せなんだ。もう死んでもいい。

まあか、信じられない。信じたくない。しかしその悪臭は間違いなくウーチャンから出ていた。

ちよつと待てよ。ウーチャンの臭いとは微妙に違う悪臭が遠くから臭つてくる。まさか……。最悪のイメージが頭をよぎつた。確かめる方法は一つしかない。

健二はステージの右端にいるカリタカに近づこうと群衆をかぎわけて進んだ。つもりだつたが実際はほとんど進んでいない。後ろから前へ進むより、横に移動する方が数倍難しかつた。というのも、後ろにいる観客が少しでも近くでシャンプー ラバーズを見ようと前の観客を押すために、健二がいるステージ前は人ととの間が一切なくなっているのだ。

これ以上前に進めない。曲は既に最後のサビが終わっている。健一は焦った。どうしよう。一刻を争う事態なのに。

ここまで来たらやつてやる。健一はステージに手を掛け、ジヤンプで飛び乗つた。ざわめく観客。ダンスを止めるシャンプレー。ズ。

そんなに騒ぐことはないだろ。ただ向こう端に移動しようつて
だけなんだから。

端まで駆け足で移動し観客側に降りようと、ステージから片足を降ろしたところで気がついた。

今、ステージの上で確かめればいいんだ。いけない。興奮して頭が回らなくなつていいようだ。

降りるのを止め、すっと後ろを振り向く。シャンプー ラバーズの三人が体を寄せ合つて震えていた。

これは！？ひょっとして超能力に気がついてしまつたのか。でもやらなくてはならない。ファンとしての使命だ。

まずはカリタ力からだ。

「カリタ力さん、僕と握手してください」

「きやあああ、誰か、誰か来てください」

悲鳴をあげるカリタ力。

「こらー、おまえなにしてる」

警備員が健一に駆け寄つてきた。

くそつ、人が善意で助けようとしてるのになんで邪魔するんだ。こうなつたら実力行使だ。

健一はカリタ力に抱きつき、そのサラサラな黒髪に顔をうずめた。くさいくさいくさい。

それは間違いなく例の臭いだつた。死の臭い、デスマルだ。とつさに思いついたにしては良いネーミングだ。スガ二回続くと言いづらいから一つ取り除こう。デスマル。良いじやない良いじやない。

「こらー。その手を離せ」

警備員が一人がかりで健一を羽交い絞めにした。

ネーミングなんて考えてる場合じやなかつた。くつそー。健一は地面に押しつけようとする警備員に抵抗しながら叫んだ。

「シャンプー ラバーズの三人は死にます。近い将来必ず死にます。病気が事故か分からぬけど必ず死にます。だから、なにか手を打たないといけません。それが出来るのは僕だけなんです。だから、放せこの野郎。おまえらにそれが出来るのか。シャンプー ラバーズの三人を救えるのか」

「なにを言つているんだ。ふざけるのもたいがいにしろ。警察に突き出してやる」

警備員が健一の腕をねじつた。

「いたあい」

カメラ小僧のフラッシュが健一の目を焼いた。

「ああ。撮るな。撮るんじゃない。撮らないでくれえ」
健一の痛切な懇願は、絶え間ないシャッター音にあつさりとかき消された。

アイ ウィッシュ アイ ワー ア スペシャル

「もう一度とこなことがないよ、親御さんはしっかりと管理してください」

一日中健一を取り調べたブルドッグのような類をした警官が健一の両親に向かつて言った。健一の父である健三は肩をすぼめ、深々と頭を下げた。健一はその姿を見て、心底ショックを受けた。家で好き勝手に威張り散らし、ことあるごとに警察官をはじめとする公務員を馬鹿にする父が、まるで万引きを見つかった老人のようにしょぼくれて頭を下げるなんて。

健三が呆然とする健一の頭をつかんで無理矢理押し下げた。

「この通り本人も反省しておりますので、どうかお許し下さい」

「いえいえ、もういいですよ。健一君も反省しているようですし」ははー、とまるで黄門様の印籠をかざされた悪代官のように健三はへりくだった。

家に帰ると、母親のおかえりなさいと同時に、健三の鉄拳が飛んだ。

ボコッ。鉄拳は健一の側頭部にヒットした。目の中で星がいくつか瞬いた。

「馬鹿野郎！！恥をかかせやがって」

健三が馬乗りになり健一を殴りつける。健一の顔があつという間にはれていく。いつもならかばってくれる母親も、目を二角にして健一をにらみつけていた。

健三が打ち疲れ健一から離れると、母親が見計らったようにスポーツ新聞を健三に手渡した。

「シャンプー ラバーズ襲われる。犯人は十四歳の中学生。コスメティックは近い内に死ぬと叫び散らす・・・恥ずかしい。恥ずかし過ぎて父さんは死にたいぞ」

そう言って新聞を健一に投げつけた。健一は脳震とうの中、震え

る手で新聞を読んだ。

「恥ずかしい恥ずかしい」

健二は連呼しながら書斎に入ってしまった。母親も「これがご近所さんにはれたら、買い物にも行けないと言つて寝室に消えていった。

シャンプレー ラバーズの三人を助けたかつただけなのに。興奮が冷め、急に悲しくなつてきた。

洗面所で血で汚れた顔を洗い、自分の部屋へいく。ベッドにうずまると、涙がドボドボ流れ出した。自分は一人ぼっちだ。ロンリーボーイだ。こういうときに友達がいれば慰めてくれるんだろうな。健二は涙を拭いて、パソコンのスイッチを入れた。友達はいなくとも擬似友達ならたくさんいる。

エクスプローラーを開いて、お気に入りからいつものチャットルームに飛んだ。

Kへ 健二 = みんな、久しぶり！…つて一日空けただけだけど =
特技猫まね = おいつす。おひさ…！…つて一日ぶりだけど =
三途の川流れ = Kくんこんばんみ。つてもつ朝になりかけてるけど =

なんて温かいレスポンス。この部屋の住人はいい人ばかりだ。

草履蟲男 = おう。よく來たな。歓迎してやるよ =

くーーー、何様のつもりだ、草履蟲男。この部屋じゃ自分の方が一ヶ月も先輩なのに。

K = 別に草履さんに会いに来たわけでは断じてない =

特技猫まね = まあまあまあ、喧嘩しないで仲良くやりましょうよ =
三途の川流れ = そうですよ。みんなシャンプレー ラバーズの大ファンなんだから絶対に仲良くできるはず。これ以上シャンラバの三人を悲しませちゃいけません =

草履蟲男 = その通り。あの豚ゴリラはどうでもいいけどカリタカとドッチにこれ以上嫌な思いをさせるのは俺がゆるさねえ =

「……」、またウーチャンのことを豚「リリラ」呼ばわりしやがった。

特技猫まね=草履蟲男さんもい加減にしなさい。Kさんも挑発に乘らないよ」

三途の川流れ=「そうだそつだ」
特技猫まねさんに機先を制された形になり、健一は草履蟲男に対する罵詈雑言を飲み込んだ。

草履蟲男=「へつへつへ。事実なんだから怒つてもしようがねえよな。それよりおめえにもいいもん見せてやるよ」

アップローダーのU.R.しが草履蟲男によつて打ち込まれた。ひよつとしてウイルスじゃないのか。そんな健一の心配を見越したように草履蟲男が、ウイルスなんて入つてねえから心配するなよ、と書き込んだ。

「くつそつ。健一はやるせない悔しさに身を焦がした。いつそこのまま落ちてやるうか。

特技猫まね=「これは見ておいた方がいいよ」
三途の川流れ=「そうだねそうだね。見るだけじゃなくて保存しておいたほうがいいと思うよ」

お世話になつてゐる一人に言われて、黙つて落ちることも出来なくなつた。恐る恐るそのファイルを開く。なんとその画像には、健一が写つていた。

最初はそれが自分だとは分からなかつた。警備員に羽交い絞めにされながらカメラに向かつて吠えている子供。ぼさぼさの髪の毛に血走つた目。まるでどこから借りてきたようなバランスの悪いでかい鼻に、伸びきつた鼻の下。

草履蟲男=「すごいだろ。これは俺様が自分で撮つたもの、すなわち世界に一枚しかないオリジナルだぜ。すごいだろ」

草履蟲男の自慢に反抗する余裕はない。自分の醜態に、言葉がないほど打ちのめされた。

草履蟲男=「どうした。うらやましくて声も出ないのか。写真を見れば分かると思うけど、俺とシャンラバの距離は五メートルとない。

俺は目の前で事件の一部始終を見てたんだ。すごいだろ＝

特技猫まね＝すごい写真だよね。僕の写真も草履蟲男さんのように鮮明に写つてはいなけれど、違った角度で犯人が写つてる＝

先ほどと同じアップローダーのUSRが表示された。見たくないが、見ないわけにはいかない。

ファイルを開くと、健二の呆けた顔がアップで出てきた。これは抵抗を止めて観念した後の写真だろ。まるで喪黒福造との約束をやぶつて落ちるところまで落ちた男の表情だ。

三途の川渡り＝俺のもついで見てください！＝

三途の川渡りさんの画像にも健二の醜い姿がはっきりと写し出されていた。激しいフラッシュとシャッター音、その奥でにやけている人間の束。健二は地上に出てきて六日目経ったセミの気分だった。ネット上では、健二の行動、顔、スタイル、着ている服などが散々ネタにされているんだろう。

草履蟲男＝おいおい、うらやましすぎて落ちたなんて言つんじゃねえぞ。なんか反応しろよ。Ｋさんよう＝

脳が宇宙空間を浮遊している。ふわふわして、体が自分のものじやないみたいだ。もうどうなつたつてい。

Ｋ＝なんだよこのブサイク。キモイにもほどがあるだろ。てか、こいつなにやつてんだよ。超変態だろ。こいつ絶対結婚できねえ。というか、その前に彼女とか一生できねえだろ＝

三途の川渡り＝ですよね。しかも、こんな写真が出回つちやつたらもう救いようないですね＝

特技猫まね＝でも、2ちゃんねるなんかでは一周して、彼を崇拜する輩も現れているようですよ＝

草履蟲男＝確かにある種のカリスマ性はあるよな。でも、俺はこんなキモイ奴、近寄りたくないな＝

三途の川渡り＝ですよね。実際のところ、これでシャンラブが死んだりしたら、神認定ですよね。これまで一番の神になれるんじゃないですか＝

草履蟲男＝マチガイナイ＝

特技猫まね＝間違いないでしょうね＝

神になる。そうだよ。これは自分の能力をアピールする最大のチャンスじやないか。シャンピー ラバーズの三人は必ず死ぬ。自分は神になりかけているんだ。健一はキーボードをジャズピアニストのように激しく叩いた。

K＝こいつは神になる。必ずなるよ。こいつは神だ。もう既に神なんだ＝

それから一日後、シャンプーラバーズの三人は死亡した。リハーサル中の彼らの上に、特設した星型の照明が落下したのだ。

事故の異様性も相まって、マスクは死を予言した健一の行方を一斉に追つた。警察に捕まり、ネット上に画像が広がっている健一を見つけるのは、泣く子も東南アジアに売り飛ばすマスクにとつては赤子の手をキムラロックでへし折るようなものだった。

シャンプー ラバーズの三人が死亡した翌日の朝、健一は連打される呼び鈴の音にビクリと反応した。

遂に来たか。三人の訃報を聞いてから一睡もしていない。本来なら悲しくて大粒の涙で枕を濡らしているところだろうが、それを凌駕するアドレナリンが健一を突き動かしていた。

マスクの襲来を予期した健一は、まず始めに聞かれるであろうことを書き起こし、そして質問に呼応する答えをその下に書き込んだ。そしてそれを丸暗記するべく暗唱。間違つたら髪の毛をかきむしつて、また最初からはじめる。そんなことを一晩中ずっとやっていた。

やれることはやつた。

健一は手首に書いたカンニングリストを見て深くうなづいた。

「なんですか一体。朝っぱらから騒がしい」

困惑した健一の声が聞こえた。昨夜も遅く帰つてきたので、シャンプー ラバーズの事故を知らないのだろう。

「おはようございます。朝里テレビの者です。健一くんはいらっしゃいますか」

「こり、抜けかけすんじゃねえよ。あつ、おはようございます。私、高尾テレビの齊藤と申します。ぜひ、今回のコスメティック照明落下事件についてですね、健一君になにかコメントをいただければと思いまして。いや、ただでとは申しません。これはとりあえずのお

近づきの記念としまして

「あつ、ずるい。そんなもの渡して。倫理規定に反しますよ」

「なにをぬかす。どの口から倫理なんて言葉が出てくるんだ。おまえらは韓国のドラマでも紹介してればいいんだよ」

「言つたな。この軽薄淫乱テレビ局が。変態アナウンサーと一緒に地獄へ落ちてしまえ」

「なんだその手は。暴力を振るうのか。おまえらの大好きな人権派弁護士を呼ぶぞ」

下の騒がしさをよそに、健一は自分の姿を姿見に映して、様々な角度から確認していた。髪型よし。肌つやよし。鼻毛よし。横顔よし。後頭部よし。ズボンの食い込みよし。これで準備万端だ。

大きく息を吐き、意を決して部屋から出る。

階段から降りてくる健一にマスコミは素早く反応した。

「あなたが新井健一君ですか」

「すいません。シャンプー ラバーズの事故について一言。出来れば独占インタビューをお願いします」

「独占！？なにをふざけたことを言つてやがる」

「そうだ。いい加減にしろ」「あんまり舐めた口を利いてると、後ろから三脚で殴りたおすぞ」

玄関に入っていたのは一社だったが、その扉の後ろに、とつさに数え切れないほどの人間が待機していた。健一は悠然と階段を降りきり、コホンと小さな咳をしてから話し始めた。

「この度は私のためにお集まりいただき、まことに感謝しております。弊社としましてはシャンプー ラバーズの事故に関して、以下の感想を述べさせていただきたいと存じております」

健一の堅苦しく不自然な言葉遣いにマスコミ勢は呆気にとられた。

「なぜに皆様方がお忙しいなか、私などのために集まつてくださったのか、分からぬほど私は愚鈍ではあります。理由は一つ。シャンプー ラバーズの事故。私がシャンプー ラバーズの死を五日前に予言したことに対する端を発していることは想像に難くないでしょ

あの予言は決して、適当に述べたものではありません。私はあのシャンプー ラバーズゲリラライブを観覧している最中に分かつてしまつたのです。シャンプー ラバーズの三人が遠くない未来に夭折するであろうことを」

辞書とスピーチ入門を駆使して作った文章を一音一句間違えずに言い切つた。

おおおおおおお。マスコミ勢にどよめきが起ころ。両親がそれを引きつった表情で見ていた。健一の発言を信じていないのでだろう。

「私はシャンプー ラバーズの三人の死を悟り、なんとか三人を救えなかと思案したのです。ひょっとしたら彼女達にそれを伝えることで、運命を変えるのではないかと思つたのですが……」

そこで健一は指で目頭を押された。泣きの演出である。もちろん練習済みだ。マスコミ勢のテンションが上がっているのを肌身に感じる。健一はシャツの袖をまくり、ばれないように手首に書かれた文字を読んだ。

「しかし、彼女達は、私を、私の発言を一切無視した」

健一の強い口調に緊張が走る。

「私は、彼女達を救いたかつただけなのに、警察へ連れていかれて変質者扱い。この屈辱があなたがたに分かりますか」

最後の方は涙声になつて訴えた。熟考したパフォーマンスではあつたが、偽りない本音も入つていて。マスコミの中からもすすり泣く声が聞こえる。と思つたら泣いているのは健一の母親だった。

「えーー、朝里テレビの井筒と申します。質問よろしいでしようか」発言したのは朝のワイドショーでよく見かける男だった。自尊心を刺激された健一は鷹揚とうなづき、精一杯の低音で「どうぞ」と言つた。

「まずその、予知能力といふんですか。それが健一さんに備わつたのはいつごろからなのでしょうか?」

ふつ。健一は余裕の笑みを浮かべた。予想していた通りの質問である。カニシングを見るまでもない。

「それは四年前からです。夢の中に神のような人物が出てきて私に手をかざしました。そうしたら翌日に、その時飼っていた太郎という雑種犬から、ひどい臭いがしたのです。私はすぐにお風呂に入れましたが、臭いは一切取れませんでした。そしてその夜、太郎は急な発作を起こして急逝したのです」

太郎が四年前に死んだのは事実だが、それ以外はまったくのまかせだった。母親は泣きながらうなずいているが、健三は怪訝な表情で健二を見ている。

「すぐにそれが特殊な能力だと気付いたのですか？」

「はい。すぐにそれが私に授けられた特殊な能力だと気付きました」

「それじゃあ、その犬、太郎君ですか、がお亡くなりになられてから、コスメティックのライブまでに何人くらいからその臭いを嗅ぎましたか？」

「それは正直数えきれません。街中、例えば渋谷なんかを散策する

と、一日に一人や二人や三起ききませんね」

「ということは一日で何十人とかもあるんですか？」

「ですねえ」記者の目を見つめて答えた。本当は渋谷など一回しか行つたことがない。

マスコミがざわめいている。

「これはすごい」「世紀のスクープじゃないか」「でもまだ本物だと決まつたわけじゃない」

そんな声が外から聞こえてきた。

「すいません。今日はこのくらいで勘弁してもらえませんか」

健三が健二とカメラの間に割つて入つた。

「健二はこれから学校なんです。それに私だって仕事に行かなくちゃならない。あんたらに玄関を占拠されると非常に困るんだ」

苛立ちを隠そうともせず、健三は言い放つた。健三が公権力の次に嫌いなものがマスコミだったことを健二は思い出した。

健三の勢いに押されてマスコミ各社は「また来ます」「今の放送しますから、今度は独占で」などの言葉と名刺を残して去つていつ

た。

静まり返った玄関。健三が健一を見つめて仁王立ちしている。

また殴られる。

健一は顔を引きつらせながら健三の動向を見守つたが、健三はなにも言わず、書斎に消え、いつものようにスーツを着ると、沈黙のまま家を出て行つた。拍子抜けしていると、後ろから母親に肩を叩かれた。まだ目がウルウルしている。

「やっぱり健ちゃんは私の子供よ。ずっと信じてた」

父親にスポーツ新聞を渡して怒りを煽つたのはどこのどいつだ。喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。普段は良い母親なのだ。

「黙つてごめん。でも、なんか言いづらくて……」

「いいのよ。思春期つてそういうものだから。それより健ちゃん、今日学校どうする?」

母親に言われて、シャンパー ラバーズの事件以降一度も学校に行つていないことを見出しだ。

「行つてくるよ。休んでばかりもいられないから」

不安げな母親に澄んだ目で答える。なにも心配することはない。さつきの映像が放送されればみんな自分を認めざるを得ないはずだ。スキップで階段を上がつた健一は、踊りだす心に身を任せEXILEをほつとさせる動きで制服を着た。

早すぎた陽春

校内はざわついていた。一年生はもちろん、一年生も二年生も健一の話題でもちきりだった。

単純に顔見知りがテレビで出したことで興奮する者。健一の能力に否定的な者、肯定的な者。今までの健一に対する扱いを反省する者。これからどうやって取り入ろうか画策する者。話題に乗るタイミングを逃し、自分は一切興味がないというポーズを必死に取り繕う者。とにかく校内は健一色に咲き乱れていた。

その中に健一が日常を身にまとつてふらつと学校へやつてきた。健一の心中はH.I.V即日検査の結果を待合室で待つている風俗嬢のように不安だったが、必死でそれを押し殺し、平素を装っていた。一瞬静まり返つた後に、生徒たちが大挙して健一のもとに押し寄せた。

「健一君かっこいい」「サインください」「アイドル紹介しりよ」「サインください」「なんで今まで黙つてたんだよ」「サインください」「俺がむかしかわいがつてやつたの覚えてるよな」「サインください」「健一せんぱーい、付き合つてください」「サインください」

予想してはいたがあまりの反響に、健一はどう対処してよいか分からなかつた。

健一はまわりついてくる者を蠅を払うように押し退け、自分の教室へ向かつた。教室に足を踏み入れた瞬間、静寂ボタンでも押したように、話し声が止んだ。嫌な空氣だった。クラスメートは健一にどう接してよいのか分からぬようだつた。

やつぱり自分のことをよく知つているクラスメート達はテレビに少し出たくらいでは認めてくれないのか。

落ち込みかけたその時、クラス一の田漢兼ひょうきん者として知られる相馬が健一の肩に手を置いて言った。

「みんなおまえのこと待つてたぞ」

ドツとクラスが沸いた。「調子良すぎるだろ!」とみんな心の中で突っ込みを入れていた。それは健二も同様だった。

「嘘つけよ。みんな朝のテレビ見たからそんなこと言うんだわ」「まあまあそんなつれない」と言つた。

相馬の軽口を契機にして、みんな健二に寄つてきた。

過去のことは・・・まあいいや。大物は小さなことにこだわらない。大事なのは未来だ。

健二は相馬の肩に腕を回して言つた。

「仲良くやろうぜ」

マスコミが得意とするモノの一つに祭り上げというものがいる。一個人や団体を会社の垣根を越えて団結し、無理矢理にでもスター・ダムにのせてしまつのだ。健二はマスコミにとつてもつてこいのターゲットだった。若くて才能があり、ほどよく頭のネジが緩んだ、マスコミに好意的な男。

新聞、雑誌のインタビューに著名人との対談、テレビレギュラー出演。次々にオファーが舞い込み、健二はそれらをスケジュールがかぶらないかぎり全て受けた。

たいがいの人間は健二を褒め称えたたので、それらは仕事というより、接待を受けにいくようなものだった。

中には健二の能力に疑問を呈する者もいないではなかつた。毒舌を売りにしている上方芸人、芸能界のご意見番を自称している在日朝鮮人のベテランシンガー、科学を信憑し、オカルトを嫌悪している大学教授等だ。

「ただ偶然が重なつただけだ」

「なんの科学的裏づけもない」

「そもそもあいつが殺したんじゃないの」

「頭がバーニングしてるんちゃいますか」

そんなひねくれた口たちも風間恭平事件によつて、おのずとつぐ

まるで得ない状況になる。

「超能力は今 2009」と題された特別番組に「メンテーターとして出演した健一が、司会進行していた風間恭平の死を番組中に予言したのだ。番組は生放送。風間は動搖して、司会進行どころではなくなり、健一に助けてくれとすがりつき、黙つて首を横に振る健二に向かつてゲロを吐いた。そして死にたくない死にたくないと錯乱したあげくに、特技であるブレークダンスを踊りながら観客にゲロを撒き散らしたのだ。

当然番組はストップ。その後二十分間にわたって富良野のラベンダー映像が流れるという異例の事態に陥つたが、視聴率は33%を叩き出し、その数字はその年の高尾テレビ視聴率トップになつた。番組には、健一に対する批判、賞賛、風間への憐憫を綴つた投書が山のように寄せられた。そして家に引きこもつていた風間は、トイレで糞を捻り出していた折に、急性脳溢血によつて糞を尻穴から垂れ下げたまま急死した。

この一件で健一の能力を疑う者はいなくなり、健一を崇拜する者は増え続けた。崇拜者がyoutubeに動画を英語字幕付きでアップしたことにより、その人気は大海を跨いで瞬く間に広がつていった。

ヨリゲラー以来の超能力ムーブメントが巻き起つた。

自らの生い立ちを綴つた自伝を発表すれば即ベストセラー。様々な国で翻訳され、二百万三百万と増刷し、気付けば一ヶ月も経たずには世界中で一千万部を売り上げていた。

一生かかつても使い切れないほどのお金を手に入れた健一は、世田谷に豪邸を購入した。ドラッグに女、北京ダック。健一は世間の十四歳とかけ離れた豪遊を毎晩続けた。

健三はそんなふしだらな行為を好ましく思つていなかつたが、分厚い札束の前に、いつもの剛腹はいとも簡単に平伏し、今では健二からもらった金で六本木のクラブにいくのを生きがいしていた。

母親も母親で、そんな健一健三の姿に触発され、歌舞伎町のホス

トクラブに毎夜毎夜繰り出すようになった。健二も自分が遊びまわっている負い目があるからなにも言えない。以前の新井家の面影は鼻毛一本残つていなかつた。

本は売れ続け、黙つてもお金が入つてくる状況が続いた。それでも健二はメディアに露出し続けた。

新井健一主演第一作「スーパー・ナチュラルボーライ

新井健一「デビューア曲「この星に生まれて」

新井健一初デイナーショウ「新井健一と語らう日本、そして地球の未来」

新井健一初教則DVD「あなたも一週間で超能力者になれる!」

新井健一初監督作品「次元を超えよう 共に歩もう」

出せば出すだけ、全ての商品が売れた。健二の真似をしようとした輩もごまんといたが、一人としてブレークした人間はいなかつた。当然の話である。健二の能力を真似出来る者などいない。

放蕩に安全ブレー キはついていない。健二の贅沢は止まることがなかつた。

一流の人間は周りも一流で固めなければいけない。どこぞのペテン師に吹き込まれたことを健二は鵜呑みにし、実行した。

横浜の中華街でスカウトした料理人。髪の毛をセットするために表参道のカリスマヘアーデザイナー。爪を切るためにNYのネイルアーティスト。体を洗うために吉原のソープ嬢。ボディーガードにステイブルンセガール。尻拭きに曙の元付き人。

今の暮らしに健二はそこそこ満足していたが、欲望は果てしなかつた。特に性欲に関しては貪欲に求め続けた。

「へんなであります、ねやな

健一はベッドに寝転んだまま女性タレント名鑑を手に取った。女性タレント名鑑には事務所別にタレントが列挙されており、顔写真と共にプロフィールが載っている。

今度はどの娘を落としちゃおつかな。

よだれが女性タレント名鑑を濡らした。健一はおもむろに手に持つていた女性タレント名鑑を持ち上げ、掛け布団の上から自分の股間辺りに打ち下ろした。

「いた／＼

新進女優の安やす子が掛け布団から頭を出した。

「ちゃんとやれ、くそ女。やる気出さないんだつたら例のコマーシャルの件もなじこするわ」

「ごめんなさい」

そう言つて安やす子は再び布団に潜り込んだ。

「おお、ここのぞいこぞい。やれば出来るじゃないか。おひ／＼、おひ／＼

う。い、いく」

「おおれ、ぼうびばばびーぼ？」

やす子が顔を出し、口を健一でこつぱにこしながら訊いた。

「全部飲め。一滴もこぼすんじゃないぞ」

「はひ。こにがーい」

にがーこと言つたやす子の表情に満足し、煙草に火をつけた。そのとき嗅覚が異常を感じた。

「くせえ、くせえええええ」

デスマルが鼻をついた。健一はやす子を思い切り蹴り飛ばした。ベッドから転がり落ちるやす子。

「臭いってなに。私がくさかつたの。ねえ、嘘でしょ
やす子が立ち上がり半狂乱ですがりついてきた。

面倒なことはごめんだ。どのみち助けることなんて出来ないのだ。

健一はやす子のどてつぱらに蹴りを入れて、屋外へ出た。

やす子の処理は元CUSTのボビーに任せればいい。健一は深呼吸した。

「く、くせええええ。まだくせえええ」

やす子がまだ近くにいるのか。それとも他の誰の臭いか。周りを見渡すと主婦一人が立ち話をしている。

あの一人のどちらかだろうか。いや、ひょっとしたらチビテブロンビのように一人同時に死ぬかもしれない。

健一は主婦に背を向けて駅に向かつて歩いた。しかし臭いは消えない。

あのホームレスか。それともこの女子高校生、いや、あそこの妊婦がくさいな。

気付けば健一は商店街に入っていた。臭かった。どこへ行こうと例の臭いが消えない。気づけば駅についていた。

おかしい。こんなにも臭いが続くことは初めてだ。

その時、駅前の広場に設置された液晶ビジョンが目に飛び込んできた。

北朝鮮、四日に人工衛星発射予定

最悪のシナリオが頭に浮かんだ。

「明日、四日に北朝鮮が人工衛星の発射を予定していることが、朝鮮労働党関係者筋の話から分かりました。北朝鮮は、もし日本が衛星を迎撃した場合、直ちに報復を加えると表明しています」

厚化粧のアナウンサーが眉間に皺を寄せて言った。

もし衛星が東京に落ちたら何人の人間が死ぬんだろう。

自分の想像に身震いした。しかし、現実問題、どこに行つても例の臭いが幅を利かせているのだ。

早く東京から逃げなければ。いや、この国から出たほうが確実だろう。まずは家に帰つて金目のものを持ち出す。それから出来るだけ遠くて自分の存在が周知されている国、アメリカあたりに高飛びだ。

臭いがさつきよりきつくなつた。時間が経つたからか、人が増えたからかわからないけど、もうこの臭気に耐えられそうもない。

健一は人から逃げるよう近くにあつたワークショップに入った。

防臭加工が施された防塵マスクを購入し着用する。

なにも臭いがしない。こりやあいいぜ。

マネージャーに電話して、高飛びの手配を指示した。目的はまだ伝えない。情報はどこから漏れるか分からぬから寸前まで極秘だ。群集が空港に押し寄せて逃げ遅れたりしたら困る。

右の口角だけくいっと上げた健一の表情は、十代とは思えない毒々しさに満ちていた。

激昂するタクシー車内

狭いタクシーの車内では防塵マスクを持つてしても臭いを防ぎきれない。

健一は窓を全開にした。しかし外も臭いために、苦痛は大して変わらなかつた。

「クーラー止めたほうがいいですかね」

運転手が申し訳なさそうに訊いた。健一はそのままでよいと答えた。

この運転手も明日には死んでいるのか。人の良さそうな親父だ。助手席の前につけられた乗車員証には五味孝司 55歳 趣味 川釣りと書かれている。子供はいるのだろうか。いるとしたら、自分と同じくらいだろう。明日死ぬと分かつていれば、こんなことやつてないだろうな。

柄にもなく感傷に浸つた。

「お客さん、お若いですね。まだ十代ですか」

「ああ、いちおうまだ16だけど」

「ほほう。うちのせがれと一緒に。一人でタクシー乗るなんて大したものですね。うちの鼻垂れ坊主なんて一人じゃなにも出来やしない。そのくせ飯の量は人の倍も食うんですよ。もうでかいのなんのつて」

「はあ、そうですか」

「それが、こないだ県の相撲大会で優勝しましてね。部屋からスカウトされたんですよ。もうそれがうれしくてね。人生で一番嬉しかったかもしけんね。ほんで高校卒業したらすぐに入門ですかよ。だから今のうちから好きなだけ食わさんといけんと思いましてね。頑張つて働いてるんですよ。ハツハツハ」

胸がうずいた。この親父だけにでも教えてやろうか。袖振り合つも多少の縁て言つし。

「親父さん、今すぐ奥さんと子供を連れて日本から離れるんだ」「はいっ！？ なにを言つてるんですかお密さん」

「明日北朝鮮のミサイルが落ちてくるんだよ」

「冗談はやめてくださいよ。脅かそうたつてそつまこさせんよ」

「信じられないだろ？ナビ本当なんだよ。今すぐ逃げればまだ大丈夫だから」

「いい加減にしてくださいよ。」「おまんま食つのでこっぱいいっぱいなんだ。ビニールの馬の骨とも知れねえ餓鬼のたわ言きいてられつか」

親父の言つ方に力チンときた。誰に口をきいてると思つてるんだ。「だつたら勝手に死にやがれ。後で死ぬほど後悔するんだな。まあ、どのみち死ぬんだけど。へつへー」

悪態を遮るよう携帯が鳴つた。夕陽テレビの木場からだ。

「はい、もしもし」

「もつすー。どうしたの苛立つた声出しちゃつて。ひょっとしてメンス？ なわけないか、オトコの子だもんね。あつ、ひょっとしてケツメンス？ これはオトコでもなるよ」

「用事にないんなら切りますよ」

「ちよつと待つてよケンちやーん。俺がなにも用がないのにテルするわけないじやん。テレビマンの忙しさをなめちやいけないよ。昨日も徹マン、一昨日も徹マン。そして今日も徹マン予定。とは言つてもマンはマンでもマンコのマンだけだよね」

「切れますよ」

「わかつたわかつた。短刀直入に言つよ。新井君で特番を組もうと思つてゐるんだ」

「特番？」

「そう。四時間で「新井君VS世界の超能力者」ってタイトルでさ、新井くんが外人と超能力対決するんだ。ギャラも弾むよ。どうかなあ」

「でも、未来予知しか出来無いですよ、俺」

「いいの。外人のほうは適当に引っ張つてくるから悪い話しじゃない。テレビに出た翌日は本やDVDが馬鹿売れする。

「いいですよ。その代わりギャラ一億円はお願ひしますよ」わざと一億円を強調して言った。親父に聞かせるためだ。

しかしバックミラーに映る親父はニヤニヤとふやけていて、一向に動搖が見えない。健一は聞こえなかつたのかと思い、再度試した。

「一億円ですよ。四時間で一億円。特番の出演料として一億円」これだけ言えばいくら頭の遅い親父でも俺の凄さを理解したはずだ。

そんな健一の思惑に反し、親父は片方の薄気味の悪い笑みをバックミラー越しに健一に送つていて。

なんなんだこのクソ親父は。なんていやらしい笑みだ。こんな表情を昔見たことがある。小学三年の夏休みに、クラスメートの成金満男が夏休みのスケジュールを訊いてきたときだ。自分が見栄をはつて、本当は千葉に潮干狩りに行くのを、ハワイでウインドサーフィンと答えたときに満男が浮かべた表情。嘲りと憐れみの入り混じつたような、不愉快極まりない表情。あの表情と同じだ。

自分がが嘘をついていると親父は思つてゐる。考えたら無性に腹が立つてきた。すでに親父の生涯収入の何倍も稼いでるんだぞ。目にもの見せてやる。

「すいません木場さん。話し変わるんですけど、今日の八時から恐縮です」つて七時までやつてますよね

「えつ、やつてると思つけど」

「あれつて生放送ですよね」

「うん。毎日ゴム無しでやつてるはずだよ。たしか今日はスペシャルで代々木公園でやつてんじゃなかつたかな」

「まじですか」

運命の巡り合わせを感じずにはいられない。

「今から俺、出られませんかね?」

「えつ。今からって、あと一時間もないよ」

「今新宿でタクシーの中なんですよ。だから三十分もあれば代々木公園行けます。マジでやばいネタ持つてくんでお願いします。マジヤバですから。木場さんが出演交渉したってことにしていいですか」

ら

「えつ、えつ、本当に。でもまじでやばいことは駄目だよ」

「大丈夫ですよ。俺が出たら視聴率うなぎ上りでしょ」

「そりだねえ。分かった。今すぐに手配するよ。その代わりさつきの話忘れないでよ。俺が出演交渉したっての」

「分かってますよ。了解です。それじゃまた後で」

わざとゆっくりデカイ音がなるように携帯を閉めた。これでぱっちら。親父の慌てふためく様が目に浮かぶ。

「お客様、成田でいいんですかい」

鼻の穴をふくらませて親父が言った。

「いや、行き先変更だ。代々木公園に向かってくれ。今すぐ。超急ぎだ」

健一は言つなり、一万円札を親父に向かつて投げつけた。

核の行方 中一の終末

「なんですね、今入った情報なんですが、あの世界的に有名な超能力者である新井健一さんが、重大発表があるとのことで、この代々木公園特設ステージに向かつてくれているそうです。重大発表とはなんなのでしょうか。楽しみと共に不安でもあります。ロビン佐藤さんはいかがですか」

「えー、これはすごいことですよ。そもそも新井さんはバラエティ番組なんかに出ないですからね。これは相当でかいニュースなんじやないかな」

「そうですね。生卵でロッキーダイエットなんてどうでもよくなつてきちゃいましたね」

「そうだねえ。生卵で瘦せるわけねえじゃねえか、馬鹿野郎つてね「そんなこと言わないでください。元も子もなくなるじゃないですか」

「メキシコ辺りの生卵食つて生死の境をわきよえればいいんだよ。そしたら馬鹿でも瘦せるだろ」

「コマーシャルに入ります」
「コマーシャルに切り替わった。

「どう今のコメント? またネット上で騒がれちゃうかなあ」
マイクをオフにしてロビン佐藤が言つた。

「もう勘弁してくださいよ」

司会を務める渡辺アナウンサーもマイクをオフにし、笑顔で答えた。

「こないだのアシスタントの娘、りかちゃんていつたつけ。もう喰つちゃつたの?」

「はい。売りが東北出身の純朴娘つてだけあって、あそことの縛まりがすごく良いんですよ。飲めって言つたら飲んでくれたし。まあ、全体としては七十点つてここですけどね」

「いいなあ。俺も試食したいなあ。頼むよカズちゃん」

「わかりました。話しつけておきますよ。こないだみたいに3P、もう一人呼んで4Pってのもいいですね」

「いいねえいいねえ。また獣みた的な女連れてきてよ」

「分かりました。ロビンさん好みのむつむつで無知な女連れてきますよ」

「頼むよ。ヒッヒッヒ」

「フッフッフ」

「新井健一さん入ります」

ADに先導され、健一が特設されたステージにやってきた。観客席からヒステリックな声援があがる。

「おれあいつ嫌いなんだよな」

ロビンが小声で言った。

「僕もです。セレブ気取りが癪に触りますよね」

渡辺がさらに小声で答えた。

「おつかれ～す」

顎の上下運動で挨拶する健一に、渡辺は首の上下運動で、ロビンは立ち上がり腰の屈折で答えた。

「今日は、すごいネタがあるって聞きましたよ。放送前にこっそり教えてもらえませんか」

猫なで声を出すロビン。

「すぐに発表するつもりなんで、今はいいでしょ」

健一はロビンの申し出をあっさりと拒否した。

「放送ります。5、4、3、」

ADの掛け声でステージ上に緊張が走る。

「えー、スペシャルなゲストがつこさきほどいらっしゃってくださいました。新井健一さんです」

「ここにちは。超能力者の新井です。今日は重大な発表があり、急遽出演させていただく運びとなりました」

「ひょっとして、それは北朝鮮に関連することですか。それとも噂

になつてゐる安やす子さんについてとか

ロビンが口を挟んできた。さつきの報復のつもりなのだろう。馬鹿に構うことはない。

健一はロビンを黙殺して先を続けた。

「これは非常に重大な発表です。だから、心して聞いてください。そして聞いた後も落ち着いて、節度ある大人としての行動を心がけてください」

「それつて、まさか北朝鮮の核爆弾が落ちてくるなんて言つんじゃないでしょ？」

再びロビンが割り込んできた。観客から喚声がもれる。

こいつ、頭を叩き割つて欲しいのか。生放送じやなかつたら番組を一旦止めて、セット裏に引きずり込んでボコボコにしていふところだ。健一はロビンの発言に一切反応せずに言葉を繋いだ。

「北朝鮮の核爆弾が、ここ東京に落下します」

観衆の喚声は悲鳴に変わつた。ざわめく会場。怒鳴り声が飛び交い、子供の泣き声が響いた。

「みなさん落ち着いてください。冷静に行動してください」

健一の声は人々の騒乱にかき消された。

それでも健一は叫び続けた。少しでも人々を正しい方向へ導くため、ではなく、最善を尽くす姿をカメラに残すためだ。

怯えきつた群衆は、我先にと出口に殺到する。

転んでそのまま踏まれていく女性。口から泡を吹く中年。血だらけの子供。

それでも健一は声が枯れるまで叫び続けた。

「みなさん、落ち着いて行動してください。まだ核爆弾は落ちてきません。だからどうか落ち着いて……」

健一は今までの献身が徒労だったと気づいた。テレビ局のカメラマンがすでにいなくなっていたのだ。

周囲を見回すとカメラマンどころか、ロビン斎藤や、局アナ渡辺もいない。放送は完全に機能停止していた。

いつなればさつさと逃げるしかない。

ステージから降りようとした健一に誰かがぶつかってきた。転倒し後頭部を打ち付けた。

「誰だよくそつ！」

顔を上げると薄気味悪い肥満体の男が健一を見下ろしていた。

「ばつと突つ立てんじや ねえよ馬鹿。 どけつ！」

立ち上がりて怒鳴りつけた。しかし男は動こうとしない。それどころか、両手を広げて道を塞ぎ、健一を見つめて怪しく笑った。

「なんだこの野郎。 そこどかねえとただじや おかねえぞ」

きつい剣幕でまくし立てたが、肥満男は気に介した様子がない。

肥満男が健一に向かってゆっくりと歩いてきた。

「なんだ、なんだってんだよ……」

肥満男の右手に握られている光物に気がついた。凶暴な歯がついた大型ナイフ。刃がアリゲーターの歯のようにギザギザと尖っている。

なんか分からぬけど、こいつやばい。

とつさに身を翻して逃げようとしたが、一瞬遅かった。健一の脇腹に肥満男のナイフがふかぶかと突き刺さる。

「なにすんだよ。 どうすんだよこれ。 どうすんだよお」

「おまえがシャンラブの三人を殺したんだ。 ウーちゃん、ドッヂ、カリタカの仇だ」

そう言って肥満体はナイフを引き抜き、今度は左胸に突き刺した。

「うおええうええ

断末魔の叫びと共に血しぶきが肥満男の黄色いバンダナに飛散した。

「これって、ひょっとして……

健一の脳裏に絶望が閃いた。

健一は最後の力を振り絞りインナーの襟元をかつ開くと、その中に鼻を突っ込み深く呼吸した。

「くせええええええええ」

臭源は溢れ出る血液ではなく、まぎれもなく例の臭い、デススメルだった。

核の行方 中一の終末（後書き）

ちょっと昔に書いた物なのでネタの鮮度がいまいちですね。すんません。

拙い文章をわざわざ読んでくれた方、本当にありがとうございます。次作の参考にさせていただきたいので、よろしかつたら感想等お願ひします

P・S [手多夢シヨコ]さん、丁寧な感想をありがとうございました。

初めての経験だったので枕カバーを塩味にしてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7010m/>

他人の匂い

2010年10月8日13時48分発行